

Japanese Utility Model Application Laid-Open No.S59-42266

Publication Date: March 19, 1984

Applicant: Takigen Seizo Kabushiki Kaisha

BEST AVAILABLE COPY

公開実用 昭和 59— 42266

19 日本国特許庁 (JP)

実用新案出願公開

12 公開実用新案公報 (U)

昭59—42266

51 Int. Cl.³
E 05 C 19 14
B 65 D 88 12

識別記号

厅内整理番号
6478-2E
2119-3E

43 公開 昭和59年(1984)3月19日

審査請求 有

(全 頁)

54 類付金具

番 4 号

出願人 タキゲン製造株式会社
東京都品川区西五反田1丁目24
番 4 号

21 実 願 昭57-121048
22 出 願 昭57(1982)8月11日
22 考 審 者 滝源秀昭
東京都品川区西五反田1丁目24

代理人 弁理士 増田守 外 1 名

BEST AVAILABLE COPY



明細書

1. 考案の名称

締付金具

2. 実用新案登録請求の範囲

ベースの前部にレバーの前端部を軸替すると共に、後部には保合バーを架設し、前記レバーの中間部には、対応する他の保止部材に嵌脱可能な保止部材の基端を軸替し、前記レバーのベース側への回転により対応保止部材に保合した保止部材を引込む締付金具において、前記レバーの後部には前後に一定噛合進退自在かつ後退方向に付射してラッチ保持板を設け、このラッチ保持板の下部には前記ベース上の保合バーに上方から保合可能なラッチを固定し、前記ラッチ保持板の進退によりラッチによるレバーのロックを掛け外しすることを特徴とする締付金具。

3. 考案の詳細な説明

本考案は、コンテナの扉等の締付用の金具の改良に関するものである。

コンテナ用の締付金具としては、例えば、ペー

652

実開59-42266



スに一端が枢轆されたレバーの中間部にフックの基端を枢轆したものが知られている。この締付金具はレバーをベース側に旋回させつつフックを引き込み、レバーを死点を越える旋回角度位置まで持ち来してロックするものである。

しかしながら従来の上記のような締付金具では、レバーのロックが外力により外れ易いという問題点がある。

本考案は、従来の締付金具の上記のような問題点に着目してなされたもので、締付時にはレバーをラッチによつてロックする構造とし、外力によりロックが外れないようにして上記問題点を解決することを目的としている。

以下図について本考案の実施例を説明する。例えばコンテナ本体に固着されるベース1の前部には、レバー2の前端が軸轆され、また後端部には係合バー1aが架設されている。

レバー2の中間部には、フック3の如き掛化部材の基端が軸轆されている。フック3は、例えばコンテナの壁に固着される対応係合用の他のフ



タク4の如き保持部材に係属自在である。

レバー2の後部には、ラッチ保持板5が前進下方、後退上方へ夫々斜めに移動自在に、かつ後退上昇方向に付勢されて取り付けられている。即ち、
水平及び
レバー2の両側板2aには前方に下がる対向各2對の長孔2bが穿たれ、これをラッチ保持板5の両側板5a、5a間に挿架されたピン6、6が貫通し、ラッチ保持板5は前進方向斜め下方、後退方向斜め上方に相対移動自在である。そして、ラッチ保持板5の下部には、ピン6、6を貫通させる2対の長孔7aを側板に有するラッチ7が、上部をラッチ保持板5の下面に当接させて取り付けられている。このラッチ7は、さらに、レバー2の側板2aに支持され、ラッチ7の下方に位置するねね受板8との間に、前下がりに偏斜して保持されたねね9によつて、ラッチ保持板5と一体に後退上昇方向に付勢されている。

ラッチ7の後端下部には、後方に突出し、後端に後上がりの摺接傾斜刃を有する嵌合突片7bが設けられている。



レバー2の前端部下面には支持金具10が固定され、これに螺杆11の丸棒部11aが挿入され、そのすり面付の先端は支持金具10の前面に露出している。丸棒部中間には小径部11bが形成され、この小径部11bの段部内を、支持金具に挿入された抜け止めピン10aが通つており、これにより螺杆11は抜け止めされている。また、レバー2の下面には、支持金具10の後部に開口をもいて位置して、ブロック12が設けられている。このブロック12には、フック3の軸13が貫通し、軸13はレバー2の側板2aの前後方向の長孔2cに容易自在に穿孔されている。従つてブロック12は軸13と共に前後移動自在である。そして螺杆11の後方ねじ部がブロック12のねじ孔12aに螺栓されており、この螺杆11を正逆回転させてブロック12の前後位置を調整可能である。ブロック12の後端面は、ある程度後方位域にある時に、前方に押し進められるラッチ保持板5の前端面に当接可能で、これによつてラッチ保持板5の移動を拘束してラッチ7の場合をロックすることができる。

次に作用を説明する。レバー2をベース1上に
起立させた第4図の状態から、レバー2をベース
1側に廻回動させるとフック3が引かれてフック
4と保合し、さらにレバー2をベース1へ押し付
けると、第5図の如く、ラッチ7の保合突片7b
後端傾斜辺が、ベース1の保合バー1aに接触し、
ラッチ7はラッチ保持板5と共に、長孔2bに沿
つてばね9を圧縮しつつ前方へ押し進められる。
そして、ラッチ7は、突片7bが保合バー1aに
保合する時はね9により押し戻される。即ち、こ
の状態でレバー2はラッチ7によりロックされ、
そのまま上方へ廻回動させることができない。こ
のロックを外す場合には、ラッチ保持板5の前方
を下方へ押し下けつつ前方へ押し進め、ばね9を
圧縮しながらラッチ7を一体に前方へ移動させて
保合突片7bと保合バー1aとの保合を解ければよ
い。両者の保合を解いた状態でレバー2を起立さ
せればフック3、4の保合が解かれる。

なお、本考案は上記実施例に規定されるもので
はない。例えばフック3、4は、他の公知の適当



な係合手段に代えることができる。

以上説明したたよに、本考案は、廻回してフック3の如き掛止部材を引き込むレバー2に、ラッチ7を有するラッチ保持板5を前後移動機能元自在に取り付け、ラッチ7をベース1の係合バー1aに係留可能な構成としたため、締付時にはレバー2の廻回軸が、ラッチ7と係合バー1aとの係合によつてロックされ、外力によりレバー2が廻回動して締付が解除されるおそれがないという効果が得られる。

4. 図面の簡単な説明

第1図は正面図、第2図は平面図、第3図は縦断正面図、第4図は締付解除時の正面図、第5図は締付動作時の正面図である。

1……ベース、1a……係合バー、2……レバー、2b……長孔、3……フック、4……フック、5……ラッチ保持板、6……ピン、7……ラッチ、7a……長孔、9……ばね。

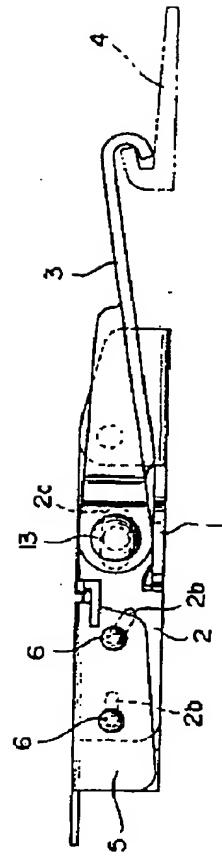
実用新案登録出願人 タキゲン総業株式会社

代理人 井道士・大 勝

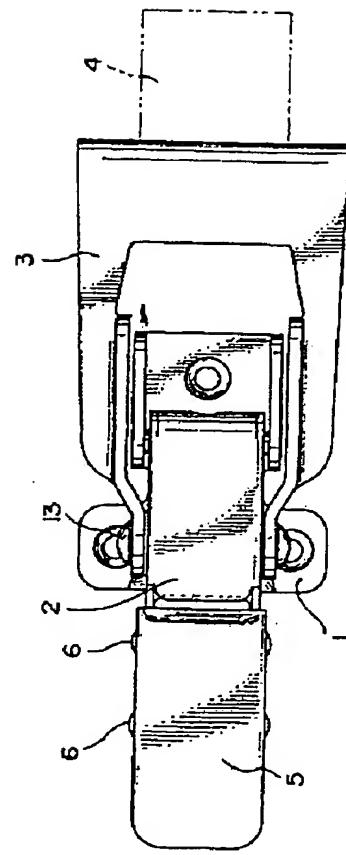
忠



第1図



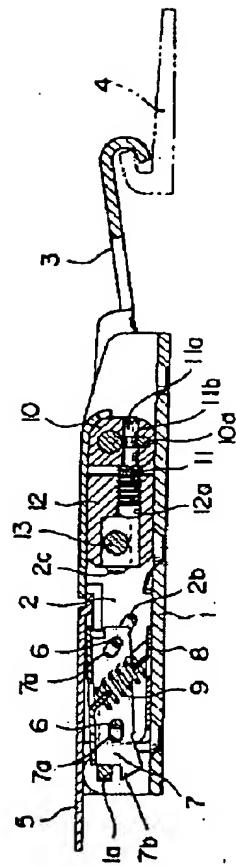
第2図



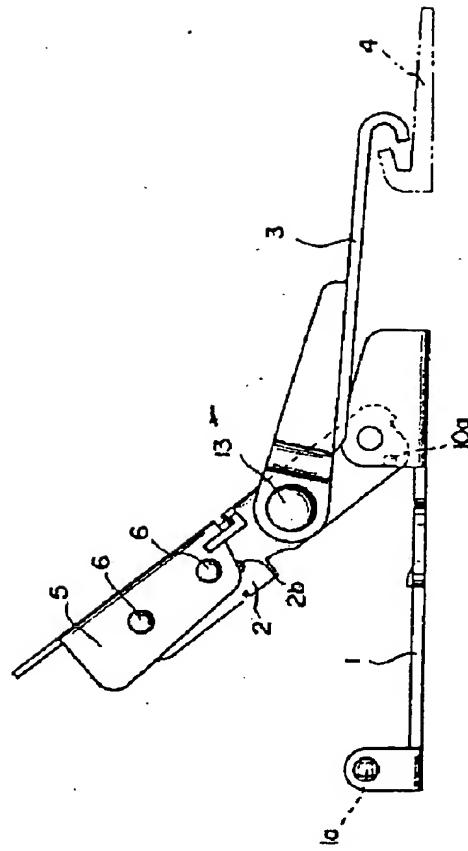
658

実用新案登録出願人 タキサン製酒株式会社
代理人 井町七 大 久
生産工場 池袋工場

第3図



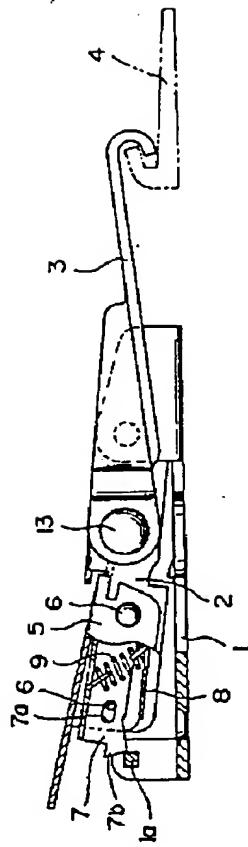
第4図



659

実用新案登録出願人 タキゲン有限公司
代願人 伊藤士大
発明名 テーブルランプ

第5図



660

発明新規特許出願人 タキサン石油株式会社
代理人 井原士 大曾根 勉

第56号 17266